

国イメージ、国民イメージと他国民・他民族に対する感情、
外国語への関心の因果関係の探究－日韓比較調査－

申知元（青山学院大学大学院）

JIN Zheng（Zhengzhou Normal University）

潮村 公弘（フェリス学院大学／カリフォルニア大学サンディエゴ校）

**Exploration of the Causal Relationship among the Images about
Nations/Citizens, the Sentiment towards Other Citizens, and
the Interest in Foreign Languages:
Comparative Research between Japan and Korea**

Jiwon SHIN (Aoyama Gakuin University)

Zheng JIN (Zhengzhou Normal University)

Kimihiro SHIOMURA (Ferris University & University of California, San Diego)

Abstract

The purpose of the present research is to explore the causal relationship among the images about nations, images about citizens, the sentiment towards other citizens, and the interest in foreign languages against Japanese youth and Korean youth. Participants for questionnaire are 205 Japanese university students and 119 Korean university students. The main measures are as follows: the images about nations (positive and negative), the images about citizens (affinity and reliability), and the sentiment towards other citizens, and the interest in foreign languages. The findings obtained by the path analyses are shown below. Toward Korea, the images about Korean people affect the images about Korea, then, affect the sentiment towards other citizens, and then, affect the interest in foreign languages, both for Japanese students and Korean students. In contrast, toward Japan, the images about Japanese people affect the images about Japan, and the sentiment towards other citizens affects the interest in foreign languages; there was no causal relationship between the images about Japan and the sentiment towards other citizens, both for Japanese

students and Korean students. The differences in causal relationship between Korea and Japan are discussed; it is suggested that a useful tactic in intercultural exchange should be different depending on its target nation or ethnicity.

Keywords:

intercultural attitudes, images about nations, images about citizens, ethnic relations

1. 本研究の目的

国・国民イメージに関する研究は、自国と他国に対する理解を深めさせる役割を果たす(加賀美・朴・守谷・岩井, 2010; 田辺, 2004)。今までの国・国民イメージに関する研究は、社会心理学(向田・坂元・村田・高木, 2001; 向田・坂元・高木・村田, 2007; 中原・潮村, 2004; 佐久間・日吉, 2013; 高木・坂元, 1991)、社会学(見城, 2004; 沼田, 1989; 田辺, 2004; 渡辺, 2006)、教育学(加賀美ら, 2010; 金, 2006; 伊・南, 2016)、政治学(加藤, 2005; 魏, 2014)など様々な分野から行われた。イメージに関する研究は、主に(a)特定の国・国民に対するイメージを測定する研究と、(b)国・国民イメージの因果関係を探る研究に大別される。

特定の国・国民に対するイメージの測定は、他国との関係が友好かを確認する指標となる。日本では、日本人がいただく他国・他国民のイメージを測定する研究と、他国民がいただく日本・日本人のイメージを測定する研究が盛んに行われてきた。内閣府の「外交に関する世論調査」、読売新聞の「信頼できる国」調査、時事通信社の「好きな国・嫌いな国」調査、日本語版総合的社会調査(JGSS)などは、日本人の他国・他国民イメージに関する調査である。これらの研究は日本人が複数の国をどのように認識しているのかを尋ね、順位を付けたり、国別の割合を算出する。内閣府は1975年から現在まで、読売新聞は1978年から1999年まで、時事通信社は1960年から現在まで調査を実施してきた。長年に渡って行われた調査結果は、日本人の他国・他国民に対するイメージの変化が確認できる貴重な資料となっている。

これらの研究は国間の比較と時間の比較という、二つの軸をもって解釈できる。日本と外交関係の深い、アメリカ、韓国、中国に対する日本人の国・国民イメージを二つの軸を用いて解釈する。まず、国間の比較は、諸国に対する日本人の評価が確認できる指標となる。図1で示されているように、内閣府の「外交に関する世論調査」では韓国と中国より

アメリカに対する親近感が 1978 年から 2014 年まで一貫して高い。日本人の欧米諸国に対する高い評価とアジアに対する低い評価については先行研究からも指摘されている(向田ら, 2001; 向田ら, 2007; 佐久間・日吉, 2013; 田辺, 2004; 渡辺, 2006)。このように国間の比較を通じて他国に対する特定国民の評価を明示的に確認できる。

一方、時間による比較は、国・国民イメージの変化と経済的・政治的関係の変化、社会的環境の変化などが推察できる指標となる。日本人は約 40 年間、アメリカに対してはイメージの変化がほとんど見られない。つまり、日本とアメリカは長年良好な関係が続いていると言えるだろう。一方、近隣国の韓国・中国に対しては態度の変化が激しく、1978 年から 2000 年までは、韓国に対して否定的なイメージを、中国に対して肯定的なイメージをいっていた。しかし、2000 年を境に韓国に対しては肯定的なイメージを、中国に対しては否定的なイメージをもつようになっている。2000 年を前後する時期から、日本では韓国ブームと中国の反日デモがメディアに注目されたことがこのようなイメージ逆転の原因として考えられる。そして、日本と韓国・中国の政治、経済、文化などの関係性が日本人の韓国・中国に対する親近感に反映されていると言える。このように、国・国民イメージを持続的に測定することは、日本と諸国の関係を覗く知見を提供する。

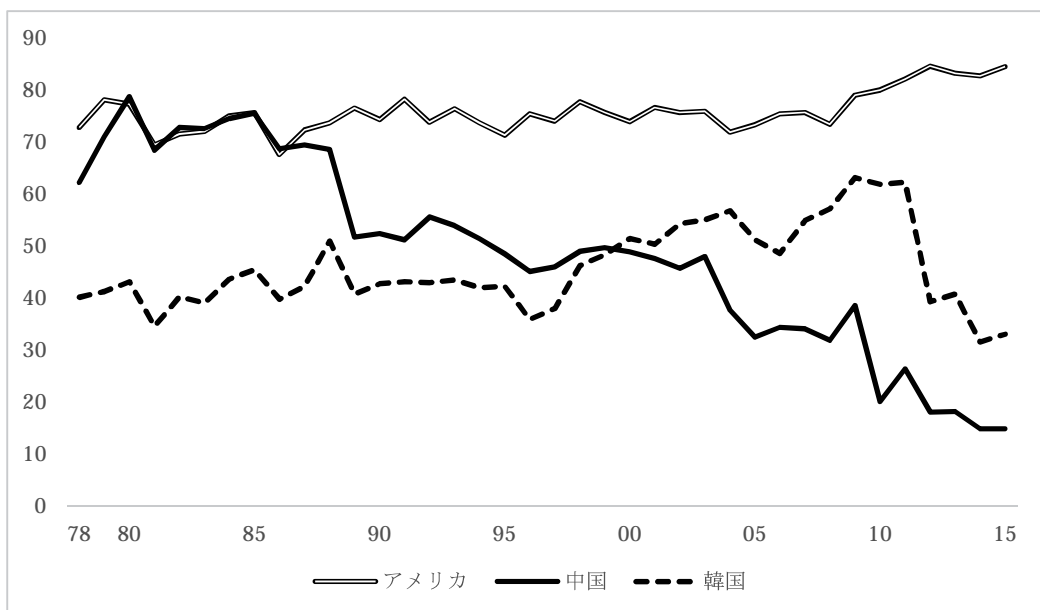


図 1. 諸国に対する日本人の親近感

本研究は、日本人の態度が劇的に変化した韓国・韓国人に焦点を当てる。韓国は日本と

は地理的に近く、文化的にも共有する部分が多いが、同時に図 1 でも分かるように日本人の韓国に対する親近感は一応していない。鄭(2010)によると、日本人の韓国・韓国人に対するイメージは、(a)無関心・回避の時期(1945 年から 1964 年)、(b)政治的関心の時期(1965 年から 1983 年)、(c)文化的関心の時期(1984 年から 1998 年)、(d)韓流ブームの時期(1998 年から現在)の 4 期に区分される。特に 2000 年代以後、日本人の韓国イメージに関する研究においては、「冬のソナタ」から始まった韓国ブームが重要である。韓国ブームに関する研究は、メディアと韓国・韓国人イメージの関係(長谷川, 2005; 石井, 2011; 渡邊・石井, 2012)や大衆文化と韓国語学習の関係(Nam, 2009; 生越, 2012; 斎藤, 2012)などが注目され、韓国ブームによって日本での韓国・韓国人イメージが大きく改善された(鄭, 2010; クォン, 2010; Nam, 2009)。しかし 2012 年、韓国の李明博大統領の竹島/独島訪問や慰安部問題などが契機となり、急激に日韓関係が悪化し、日本では嫌韓が増え(浅羽・木村・佐藤, 2012; 黒田, 2014)、内閣府の「外交に関する世論調査」からも韓国に対して親近感を感じないと答える人が増えている。

一方、韓国人が日本・日本人に対していっているイメージは改善されてはいるが、日本人がいただくイメージのような劇的な変化があるとは言い難い。鄭(1998)は、韓国人の日本・日本人に対するイメージは、(a)無関心・避関心の時期(1945 年から 1965 年)、(b)政治的関心の時期(1965 年から 1982 年)、(c)ナショナリズムの時期(1982 年から 1998 年)に分ける。戦後から 1982 年までは日本と韓国の互いのイメージが一致したが、1982 年を境に日本の歴史教科書の記述が問題となり、日本への反発が広がり、韓国における日本のイメージがさらに悪化した。鄭(1998)は韓国でのナショナリズムが 1970 年代の民族国家としての教育と経済的成長が目覚ましかった 1980 年代に得た「新しい生活への展望」によって実現されたと指摘し、韓国・韓国人の優越性を強調しすぎることによって日本への反発が高まる結果になったと解釈している。韓国人の日本・日本人に対する否定的な評価は 1980 年代から現在までも続いている。韓国の東亜日報社と日本の朝日新聞社の共同世論調査によると 1984 年には 38.9%の韓国人が日本は「嫌い」と答え、1995 年には 68.9%に増加していた。1999 年に 42.6%に低下したが、2000 年代以後も日本・日本人に対する否定的な評価は続き、2010 年には 36%, 2015 年には 50%の韓国人が日本に対して否定的な評価をしている。韓国ギャラップで行われた日本に対する好感度、親密感、選好度などの調査でも同様の結果が見られる。韓国にとって日本は、優越性を示すべき競争相手でありながら、否定的なイメージの強い国である(鄭, 1998)。

国・国民イメージのもう一つの流れは因果関係の構築に関する研究である(一二三, 2003; 加賀美ら, 2010; 生越, 2012; 斎藤, 2012; 山崎・平・中村・横山, 1997; 山崎・倉元・中村・横山, 2000)。国・国民イメージは直接的・間接的な接触により決められる。たとえば、加賀美ら(2010)、生越(2012)、斎藤(2012)などによると、韓国人の日本に対する肯定的な評価は日本との積極的な接触と大衆文化への関心により高められ、否定的な評価は領土・歴史問題のような国際的な問題により高まる。日本に來ている外国人留学生を対象とした山崎ら(1997)、山崎ら(2000)、一二三(2003)でも、日本人との肯定的または否定的なエスニシティ経験は日本人との交流意図や日本人イメージという対日態度を決めることが確認されている。そして、異文化態度や外国語学習に対する態度に影響を与える。山崎ら(1997)、山崎ら(2000)、一二三(2003)では、対日態度が異文化態度や日本語の学習動機・学習ビリーフに影響を与え、会話場面で現れる配慮を形成することが明らかになっている。国・国民イメージと外国語能力の関連性は金(2006)でも日本人韓国語学習者の韓国人イメージと韓国語能力の相関関係から示されている。このように国・国民イメージは直接的、または間接的接触から生成され、異文化態度や外国語能力などと関連していることが知られている。しかし、国・国民イメージと異文化態度、外国語能力を一つの因果モデルに含め、さらに複数の国から自国と他国のイメージを検討した研究はない。

今までの研究のように、日本から見る外国、または外国から見る日本のみの研究ではイメージに関する議論の一部しか把握できない。本研究では日本と韓国で質問紙調査を行い、両国が自国と他国(相手国)をどのように見ているかを明らかにする。さらに、日本と韓国の大学生がもつ他国・他国民に対するイメージと異文化態度の因果関係を探る。そして、本研究の調査結果に基づいて、今後の異文化理解教育や外国語教育などへの提言を考える。日本と韓国を対象に同じ質問紙による調査を実施することで、多角からの考察が可能となるだろう。

2. 方法

2.1. 調査概要

本研究では、日本人と韓国人の大学生を対象に質問紙調査を行った。日本人は2015年5月と6月に横浜市内の女子大学で、韓国人は同年11月に韓国慶尚南道の大学で現地の研究者の協力を得て質問紙調査を実施した。日韓ともに授業担当者に質問紙の配布及び回収を依頼した。日本人は205名が参加し、平均年齢は18.75歳(SD=0.71)である。韓国人は119

名が参加し、研究協力者の平均年齢は 21.82 歳 ($SD=2.84$) である。韓国は徴兵制や短期留学などで休学が多いため、平均年齢が日本より高く、標準偏差が大きい。

2.2. 使用尺度

質問紙は日韓のイメージに関する項目、異文化態度に関する項目、調査参加者の属性項目によって構成されている。調査参加者の属性として、国籍・年齢・学部・外国人友人の有無・海外経験などを合わせて記入してもらった。

日韓のイメージに関する項目は国イメージと国民イメージを尋ねた。国イメージは坂西・王(2007)のナショナル・アイデンティティの強さから見た国のイメージの 10 項目を、「まったくそう思わない(1)」から「非常にそう思う(5)」で評定した。分析には Shiomura & Shin(2016)に基づき、肯定イメージ 4 項目(「豊かな」「強い」「魅力的」「平和的」)と否定イメージ 2 項目(「汚い」「ずるかしこい」)を用いた。国民イメージに関する項目は山崎ら(1997)を修正し、日本人、韓国人、中国人に対する印象を形容詞による SD 法尺度で尋ねた。親和性イメージ 3 項目(「親しみにくい-親しみやすい」「つめたい-あたたかい」「つきあいにくい-つきあいやすい」)と信頼性イメージ 2 項目(「信頼できない-信頼できる」「不正直だ-正直だ」)で構成されている。1 は否定的な評価、7 は肯定的な評価の 7 件法で尋ねた。

異文化態度は鈴木ら(2000)の国際理解測定尺度(IUS2000)を用いた。9 つの下位因子から「多くの外国人と友達になりたいと思う」、「外国人が大勢集まる場所には近づかないようにしている(逆転項目)」などで構成された「他国民・他民族に対する感情(8 項目)」と「英語などの外国語で、いろいろなことを話してみたい」、「語学教室に通いたいとは思わない(逆転項目)」による「外国語への関心(8 項目)」を取り上げた。これらの項目は「全くあてはまらない(1)」から「非常によくあてはまる(5)」の 5 段階で評価した。

すべての質問項目は日本語版を作成し、研究者が韓国語に翻訳を行った。さらに、バイリンガルに韓国語版を日本語に翻訳するように依頼し、逆翻訳法による等価性の確認作業を得た。日本語と韓国語の質問項目に意味の乖離がないように配慮し、質問内容の等価性を確保するように努めた。

3. 結果

3.1. 妥当性と信頼性の検討

異なる集団を比較するさいには同じことが同じように測れているかの問題、つまり測定の等価性が重要になる(田崎,2008)。集団間で異なる動きを見せる項目は測定の等価性が保たれてない項目であり、このようにバイアスをもつ項目を **DIF(Differential Item Functioning)**項目と呼ぶ。特定の集団に有利、もしくは不利に機能する **DIF** 項目を分析から外すことで、測定の等価性が確保される。とりわけ、合計点を基準としてバイアスをもつ項目を検出することから基準関連妥当性を確認することができる(田崎, 2008)。

本研究では 2 要因分散分析による **DIF** 分析を行い(van de Vijver & Leung, 1997; 田崎, 2008)、日本と韓国の間には **DIF** 項目があるかを確認した。偶然による **DIF** 項目の検出を防ぐため、ランダムに二つのグループに分け、両データから **DIF** 項目として特定された項目のみを分析から外すことにした。なお、項目ごとに複数回検定を行うため、タイプ I エラーが起きる可能性が高いことから、本研究ではボンフェローニ修正を用いて有意水準を 1% に設定した。

分析の結果、国イメージ、国民イメージにおいては日韓の間では **DIF** 項目が見つからなかった。一方、異文化態度の他国民・他民族に対する感情から **DIF** 項目(「外国人とは距離をおいて付き合いたい」)が確認され、本研究では該当項目を分析から外すことにした。

また、各尺度を構成する項目間の内的一貫性を確認するために **Cronbach** の α 係数を確認した。日韓全体の信頼性係数、国ごとの信頼性係数、項目の数、相関係数などを検討した。日本肯定イメージの信頼性係数は日本が .663、韓国が .641 である。韓国の肯定イメージの信頼性係数は日本が .682、韓国が .579 である。韓国人による韓国肯定イメージの信頼性係数が .60 以下で低いが、(a)日本と韓国を合わせた全体の信頼性係数が .655 であること、(b)項目削除をしても信頼性係数が変わらないことを考慮し、項目を削除せず分析を進めることにした。日本と韓国の否定的なイメージは 2 項目で構成されていることから、信頼性係数と相関係数の双方を参照した。その結果、日本否定イメージは信頼性係数の値が低いが(日本 α 係数 : .486, 韓国 α 係数 : .430)、相関係数は有意であった(日本 : $r=.324, p<.05$; 韓国 : $r=.279, p<.05$)。日本の否定イメージの測定項目が不十分である可能性はあるが、2 項目で項目数が少なく、相関係数が有意であることから分析に用いることにした。韓国否定イメージの信頼性係数が .60 以上であり(日本 α 係数 : .665, 韓国 α 係数 : .726)、相関係数も有意であった(日本 : $r=.503, p<.05$; 韓国 : $r=.574, p<.05$)。異文化態度は日本と韓国

における評価根拠の差異がないと判断し、日本と韓国を合わせた上で、信頼性係数を算出した。その結果、異文化態度の他国民・他民族に対する感情は.843、外国語の関心は.797であった。

3.3. 平均値の差の検定

各変数に影響を与えると思われる属性は回答者の国籍、外国人友人の有無、海外経験の有無である。しかし、海外経験がある人は日本で 5 人、韓国で 3 人のみであったことから海外経験変数は分析から外すことにした。国イメージおよび異文化態度について回答者の国籍と外国人友人の有無を独立変数とする 2 要因分散分析を行った。その結果、日本否定イメージと韓国否定イメージにおいて交互作用効果が確認された。

まず、主効果について検討する。他国民・他民族への感情は外国人友人の有無によって差が確認された。外国人友人がいる人($M=4.01$, $SD=0.58$)は、外国人友人がいない人($M=3.62$, $SD=0.67$)より他国民・他民族への感情の値が 5%水準で有意に高い。しかし、国の主効果は確認されなかった(韓国 : $M=3.78$, $SD=0.55$; 日本 : $M=3.76$, $SD=0.72$)。

外国語への関心においては、国の主効果と外国人友人の有無の主効果がそれぞれ示された。韓国人($M=3.76$, $SD=0.65$)は日本人($M=3.38$, $SD=0.81$)より外国語に対する関心が高かった。また、外国人友人がいる人($M=3.64$, $SD=0.76$)は、外国人友人がいない人($M=3.45$, $SD=0.78$)より外国語への高い関心を示すことが明らかになった。

日本肯定イメージと韓国肯定イメージは国間の差はあったが、外国人友人の有無による差は見られなかった。日本肯定イメージは日本人($M=3.81$, $SD=0.57$)が韓国人($M=3.40$, $SD=0.58$)より高く、韓国肯定イメージは韓国人($M=3.13$, $SD=0.59$)が日本人($M=2.89$, $SD=0.62$)より高い値を示した。

表 1. 国別と外国人友人有無の平均値と標準偏差

	日本	韓国	外国人友人有	外国人友人無
他国民・他民族に対する感情	3.76(0.72)	3.78(0.55)	4.01(0.58)	3.62(0.69)
外国語への関心	3.38(0.81)	3.76(0.65)	3.64(0.76)	3.45(0.78)
日本肯定イメージ	3.81(0.57)	3.40(0.58)	3.72(0.63)	3.61(0.60)
日本否定イメージ	2.52(0.69)	3.17(0.79)	2.74(0.76)	2.77(0.82)
韓国肯定イメージ	2.89(0.62)	3.13(0.59)	2.94(0.59)	3.01(0.62)
韓国否定イメージ	3.13(0.76)	2.93(0.81)	3.02(0.78)	3.07(0.78)

表 2. 外国人友人の有無による国別平均値と標準偏差

	外国人友人有		外国人友人無	
	日本	韓国	日本	韓国
他国民・他民族に対する感情	4.01(0.61)	4.00(0.50)	3.56(0.75)	3.69(0.55)
外国語への関心	3.51(0.77)	3.99(0.62)	3.27(0.84)	3.67(0.64)
日本肯定イメージ	3.77(0.63)	3.56(0.62)	3.83(0.53)	3.35(0.56)
日本否定イメージ	2.63(0.71)	3.03(0.82)	2.41(0.65)	3.22(0.78)
韓国肯定イメージ	2.83(0.56)	3.25(0.59)	2.95(0.65)	3.08(0.56)
韓国否定イメージ	3.14(0.76)	2.67(0.75)	3.10(0.75)	3.03(0.82)

表 3. 2 要因分散分析の結果

	国	外国人友人有無	交互作用効果
他国民・他民族に対する感情	0.56	23.18***	0.85
外国語への関心	22.38***	8.86**	0.18
日本肯定イメージ	22.77***	1.11	3.73
日本否定イメージ	45.13***	0.03	5.28*
韓国肯定イメージ	13.39***	0.13	3.73
韓国否定イメージ	7.90**	2.79	4.33*

有意な交互作用効果が確認された日本否定イメージと韓国否定イメージの詳細を把握するために、単純主効果検定を行った。

日本否定イメージにおいて、外国人友人の有無に関係なく、韓国人は日本人より日本を否定的に評価していることが分かった。言い換えると、外国人友人がいても(韓国人:M=3.03, SD=0.82; 日本人:M=2.63, SD=0.71)、外国人友人がいなくても(韓国人:M=3.22, SD=0.78; 日本人:M=2.41, SD=0.65)韓国人は日本人に比べて日本否定イメージの値が5%水準で有意に高い。回答者の国籍別に外国人有無において差があるかを見ると、韓国人は外国人友人の存在に差が見られないが、日本人は外国人友人がいる人は外国人友人がいない人より日本を否定的に評価していることが示された。

韓国否定イメージは、外国人友人がいる韓国人が日本人より有意に低い値を示したが、外国人がいないと日韓に差がなかった。国別にみると、外国人友人がいる韓国人は外国人友人がいない韓国人よりも有意に低い値を示した。一方、日本人は韓国の否定的イメージに対して外国人友人の存在が関連してないことが明らかになった。

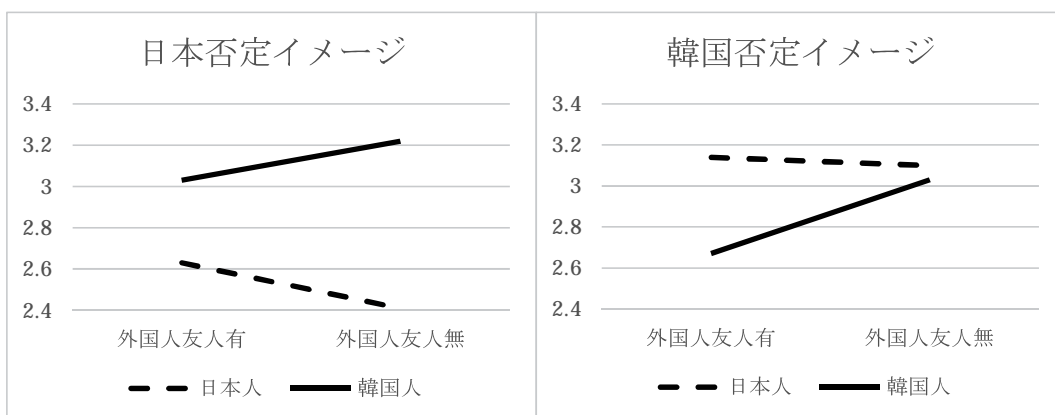


図 1. 回答者の国籍と外国人友人の有無による国イメージの差

3.4. パス解析

国民イメージ、国イメージ、異文化態度(他国民・他民族に対する感情、および外国語への関心)の関係を明らかにするために多母集団同時分析によるパス解析を実行した。国民イメージは国イメージ形成に影響を与え、国イメージが他国民・他民族に対する感情へ、そして他国民・他民族に対する感情によって外国語への関心の度合いが決まるとの因果モデルを作成した。

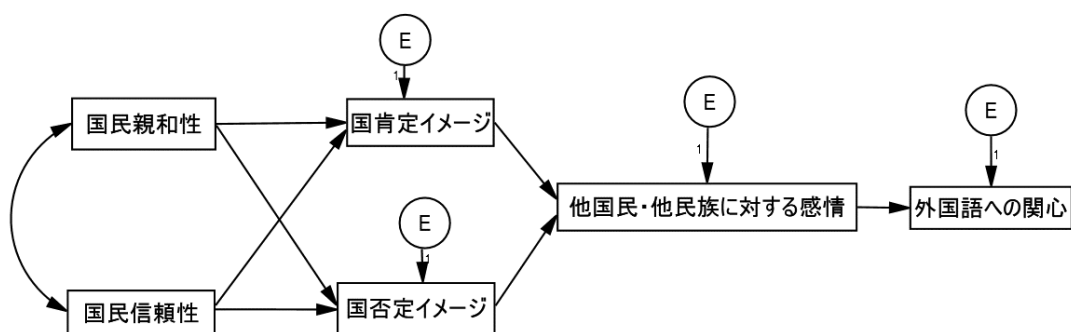


図 2. 異文化態度の構築の因果モデル

国民イメージは国イメージに影響を与えると予想される。先行研究では国イメージを決める要因として歴史、製品、メディア、国民性などが挙げられ、国民イメージは国イメージを構成する一つの要因であると言える。

そして、国イメージは異文化態度に影響を与える。本研究では異文化態度として、「他国民・他民族に対する感情」と「外国語への関心」を取り上げている。「他国民・他民族に対する感情」は、異文化と交流したい、異文化の人と仲良くなりたいという程度である。山崎ら（1997）、山崎ら（2000）は国民イメージが異文化との交流意図に影響を与えることを明らかにした。本研究の「他国民・他民族に対する感情」と山崎ら（1997）の異文化交流意図は類似する概念である。そのため、国民イメージが国イメージを媒介して「他国民・他民族に対する感情」に影響を与える因果関係を考えることができる。

また「外国語への関心」は、外国語を学習し、身につけたい気持ちを表す。先行研究では、国民イメージが外国語能力に影響を与えること（金, 2006）や、異文化態度が外国語への態度に影響を与えること（Byram, 1997；石井, 2010）などが指摘されている。本研究では、外国語能力は測定していないが、外国語へ関心の程度と関連があることが予測できる。そのゆえ、異文化を意識し、理解することが外国語能力を向上させるとの先行研究の知見に基づいて、「他国民・他民族に対する感情」が「外国語への関心」に影響を与えるとの因果関係を設定した。

3.4.1. 日本人に対するイメージ

まず、日本人イメージ（親和性イメージ、信頼性イメージ）と日本イメージ（肯定イメージ、否定イメージ）を含めたモデルを作成した。各パスに制約のない配置不変モデルと

すべてのパスに制約をかけた測定不変モデルの間に差がないことが確認された($\chi^2=11.637$, $df=8$, n. s.)。

測定不変モデルに基づいて各パスの関係を検討した。親和性イメージから肯定イメージへのパスは正の関係性を示し(日本人: $\beta = .177$, $p < .05$; 韓国人: $\beta = .170$, $p < .05$)、信頼性イメージから否定イメージへのパスは負の関係性を示した(日本人: $\beta = -.209$, $p < .05$; 韓国人: $\beta = -.160$, $p < .05$)。また、肯定イメージから他国民・他民族に対する感情へのパスは10%の有意傾向が確認されたが(日本人: $\beta = .094$, $p < .10$; 韓国人: $\beta = .127$, $p < .10$)、否定イメージから他国民・他民族に対する感情へのパスは5%水準で有意ではないことが明らかになった。他国民・他民族に対する感情から外国語への関心へのパスは標準化係数の値が日本では.559、韓国では.517であることから、非常に強い正の関係性が示されたと言える。

表 4. 日本・日本人イメージ

	χ^2	df	p	CFI	RMSEA	AIC	比較	$\Delta\chi^2$	Δdf	p
日本のみ	6.761	7	.454	1.000	.000	46.761				
韓国のみ	6.823	7	.448	1.000	.000	46.823				
配置不変モデル	13.591	14	.481	1.000	.000	93.591				
測定不変モデル	25.228	22	.286	.978	.021	89.228	配置不変	11.637	8	.168

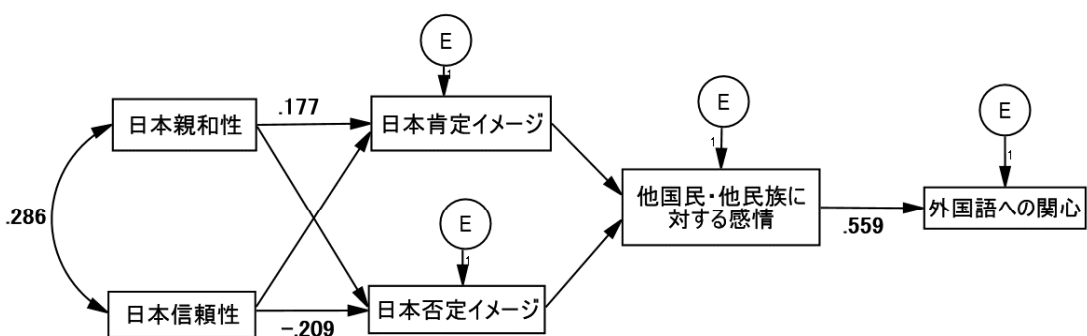


図 3. 日本人の日本・日本人イメージ(5%水準有意なパスのみ数値を報告)

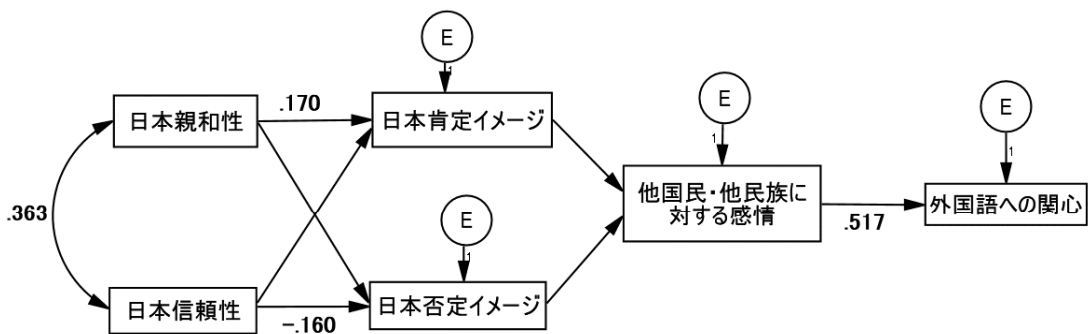


図 4. 韓国人の日本・日本人イメージ(5%水準有意なパスのみ数値を報告)

3.4.2. 韓国に対するイメージ

日本に対するイメージと同様に、韓国人イメージ（親和性イメージ、信頼性イメージ）と韓国イメージ（肯定イメージ、否定イメージ）を含めたモデルを作成した。各パスに制約のない配置不変モデルとすべてのパスに制約をかけた測定不変モデルの間に差がないことが確認された（ $\chi^2=10.799$, $df=8$, n. s.）。

測定不変モデルに基づいて各パスの関係を検討した。韓国人親和性イメージから肯定イメージへのパスは正の関係性が（日本人： $\beta=.329$, $p<.05$ ；韓国人： $\beta=.313$, $p<.05$ ）、否定イメージへのパスは負の関係性が示された（日本人： $\beta=-.142$, $p<.05$ ；韓国人： $\beta=-.126$, $p<.05$ ）。信頼性イメージから肯定イメージへのパスは正の関係性があることが分かったが（日本人： $\beta=.200$, $p<.05$ ；韓国人： $\beta=.207$, $p<.05$ ）、否定イメージへのパスは有意ではなかった（日本人： $\beta=-.079$, n. s.；韓国人： $\beta=-.076$, n. s.）。また、肯定イメージが高ければ高いほど他国民・他民族に対する感情が高い値を有することが明らかになったが（日本人： $\beta=.124$, $p<.05$ ；韓国人： $\beta=.166$, $p<.05$ ）、否定イメージと他国民・他民族に対する感情への関係性は示されなかった。他国民・他民族に対する感情から外国語への関心へのパスは標準化係数の値が日本では.561、韓国では.516であった。

表 5. 韓国・韓国人イメージ

	χ^2	df	p	CFI	RMSEA	AIC	比較	▲ χ^2	▲ df	P
日本のみ	15.308	7	.032	.968	.076	55.308				
韓国のみ	7.078	7	.421	.999	.010	47.078				
配置不変モデル	22.383	14	.071	.974	.043	102.383				
測定不変モデル	33.182	22	.059	.966	.040	97.182	配置不変	10.799	8	.213

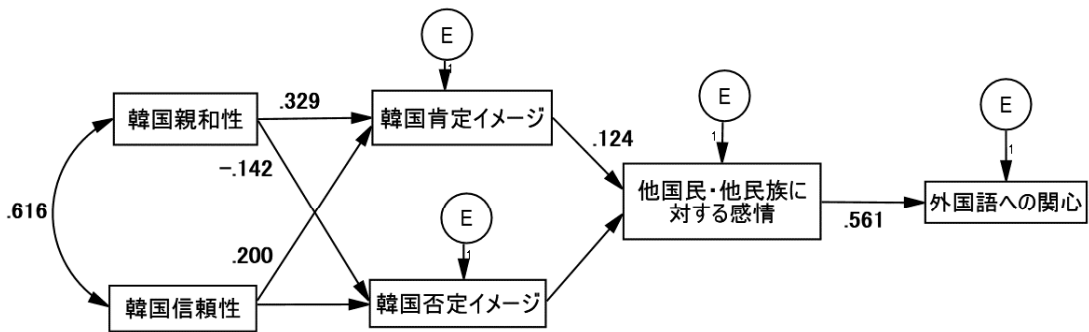


図 5. 日本人の韓国・韓国イメージ(5%水準有意なパスのみ数値を報告)

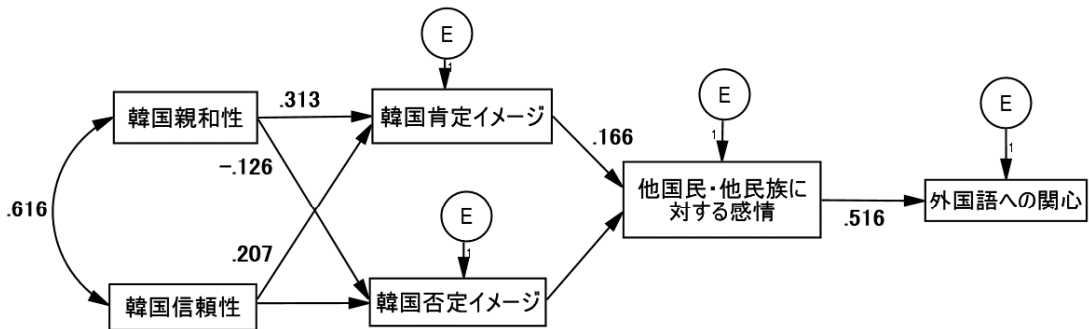


図 6. 韓国人の韓国・韓国イメージ(5%水準有意なパスのみ数値を報告)

4. 考察

4.1. 比較文化調査における等価性の問題

異なる集団間での比較を行うさいには、測定の等価性の問題が重要である（田崎，2008）。特に、比較文化研究においては、この等価性の問題は極めて重要性の高い問題となる。信頼性・妥当性の問題が心理測定上、重要であることは指摘するまでもない。妥当性検証の重要な側面として測定の等価性検証が必要であり、本研究においてもまず DIF 分析を行った。

DIF 分析の結果、他国民・他民族に対する感情を測定するための項目群の中に、項目の傾きが異なる不均一 DIF 項目（具体的には「外国人とは距離をおいて付き合いたい」）の存在が確認された。本研究では、DIF 項目として析出された項目数が 1 項目だけと少なく、残りの項目を用いて構成概念の測定が十分に可能と考えられたことから、当該の 1 項目を除外して分析を進めた。残りの項目については、集団間の等価性（文化間の等価性）が認められたことから、比較したい集団間において等価な測定変数のみを用いて分析を進める

ことができた。また、その後の信頼性分析においても各測定概念が同じ潜在変数を測定していることが認められた。

4.2. 異文化態度および国民・国イメージと個人特性との関係

はじめに、イメージ項目の評定平均値について確認しておきたい。表1と表2に、それぞれのイメージ項目に対する条件ごとの平均値が示されている。ここから読み取れることは予想外の結果ではないものの、自国を肯定的に評価する傾向があり、他国（相手国）に対して否定的な評価をする傾向があることが改めて確認された。この傾向性には、内集団－外集団バイアスや、情報量の格差などが反映しているだろう。また、韓国人は日本に対して肯定イメージと否定イメージの双方の評価が韓国に対する評価より高い傾向が見られた。矛盾するように見えるこの結果は、日本に対する韓国人の評価は否定的なものではあるが、同時に先進国としての日本という認識も認められるという先行研究の知見（例えば、鄭, 1998）とも一致するものであると言える。

次に、外国人友人の有無と異文化態度の関係について検討していく。各変数に対する2要因分散分析の結果より、「国（国籍）」と「外国人友人の有無」が、各変数と有意な関連を有していることが示された（表3）。回答者の国籍である「国」が異なれば、イメージ関連変数の平均値が有意に異なることは容易に想定できる。ここで注目したい変数は「外国人友人の有無」であり、外国人友人がいるかどうかは、他国民・他民族への感情と外国語への関心に対して有意な主効果を有していた。さらに「外国人友人の有無」は、「国」との2要因交互作用効果として、日本否定イメージと韓国否定イメージといういずれも否定イメージに対して、有意な関連を有していた。

「外国人友人がいる」ということは、「結果として外国人友人がいる」と考えられがちかもしれないが、「外国人友人がいる」ということがイメージ変容を引き起こしているという捉え方が近年では強調されて来ていると言えるだろう。今後の研究においては、外国人友人の有無（外国人友人の存在）は、偏見低減に関する「拡張接触効果（the extended contact effect: Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, & Ropp, 1997）」との関連で展開をしていくことができるだろう。本研究では、外国人友人の有無を尋ねてはいるが、今後の研究においては、日本人回答者に対して韓国人の友人の有無を尋ね、また、韓国人回答者に対して日本人の友人の有無を尋ねることによって、「拡張接触効果」について検討していくことができるだろう。

4.3. 因果モデルの検討

続いて、本研究の主要な目的である因果モデルの検討を行う。

因果モデル全体に関して、得られた知見を包括的に述べると、2つのことが指摘できる。第1に、「日本人・日本」に対しても、「韓国人・韓国」に対しても、日本人（日本人回答者）と韓国人（韓国人回答者）との間で因果関係に違いがないことが認められた。このことは、文化差ありき、あるいは国民性の違いありきという視点からの予想には反する興味深い知見であると言える。第2に、「日本人・日本」に対する因果関係と、「韓国人・韓国」に対する因果関係とは、日本人回答者・韓国人回答者ともに、その因果関係が異なっていることが認められた。（日本人回答者も、韓国人回答者も同じように）、「日本人・日本」に対してと「韓国人・韓国」に対して異なる捉え方をしている、という知見は興味深い知見と言えよう。

まず「日本人・日本」に対してと「韓国人・韓国」に対して、日本人回答者と韓国人回答者との間で因果関係に違いがない点について具体的に考察していく。「日本人・日本」に対しては、日本人回答者と韓国人回答者とで等しい因果モデルが支持された（図3、図4）。すなわち、日本人回答者、韓国人回答者ともに「日本人・日本」に対しては、親和性イメージが高いことが肯定的イメージを高め、また信頼性イメージが高いことが否定的イメージを低減させていた。加えて、他国民・他民族に対する感情がポジティブなものであることが、外国語への関心を高めていた。また、「韓国人・韓国」に対しても、日本人回答者と韓国人回答者とで等しい因果モデルが支持された（図5、図6）。すなわち日本人回答者、韓国人回答者ともに、「韓国人・韓国」に対しては、親和性イメージが高いことが肯定的イメージを高め、親和性イメージが高いことが否定的イメージを低め、信頼性イメージが高いことが、肯定的イメージを増加させていた。さらに、肯定的イメージが高いことが他国民・他民族に対する感情をポジティブなものとし、他国民・他民族に対する感情がポジティブなものであることが外国語への関心を高めていた。ここで、日本人回答者・韓国人回答者ともに、「韓国人・韓国」に対しては、韓国への肯定的イメージが他国民・他民族に対する感情をポジティブなものとしているという結果は注目に値するだろう。このことは、異文化態度（他国民・他民族に対する感情と、外国語への関心）を良好なものに変容させていくさいに、「韓国人・韓国」に対しては（日本人にとっても韓国人にとっても）韓国への肯定的イメージを喚起することの意義をあらわしていると考えられるからである。

次に、日本人回答者・韓国人回答者ともに、「日本人・日本」に対する変数間の因果関係

と「韓国人・韓国」に対する変数間の因果関係とが異なっている（日本人回答者と韓国人回答者とで同じように異なる捉え方をしている）ことも興味深い知見であったと言える。日本人回答者による、「日本人・日本」に対する変数間の因果関係（図3）と「韓国人・韓国」に対する変数間の因果関係（図5）は異なっている。また、韓国人回答者による、「日本人・日本」に対する変数間の因果関係（図4）と「韓国人・韓国」に対する変数間の因果関係（図6）は異なっている。そして、図3と図4に示されている因果関係のパターンは同一で、図5と図6に示されている因果関係のパターンも同一である。このように、「日本人・日本」に対して、日本人回答者と韓国人回答者とで同じ因果関係パターンが認められ、「韓国人・韓国」に対しても、日本人回答者と韓国人回答者とで同じ因果関係パターンが認められたことから、認識の枠組みが同様であることが確認された。日本人と韓国人とでは、様々な社会的事象に対する認知が異なることが指摘されることが多いことに鑑みると、この知見は興味深いと言える。

なお、ここで留意しなければならないことは、これからの変数間の関係がどのようなサンプルに対しても、またどのような時期においても当てはまるとは限らないことである。特に心象（**representation**）にかかわる項目は、移ろいやすく、また様々な要因によって影響を受けやすい。しかしそれゆえに、介入（**intervention**）や社会政策上の有用性も高いことから、国民イメージや国イメージを検討することが重要であるとも言える。

まとめ

本研究の目的は、日本と韓国の大学生を対象に、それぞれが「日本人・日本」「韓国人・韓国」に対して抱いているイメージと、異文化態度（「他国民・他民族に対する感情」と「外国語への関心」）との間の因果関係を探ることである。

日本人と韓国人の大学生を対象に質問紙調査を行った。日本人は2015年5月と6月に横浜市内の女子大学で、韓国人は2015年11月に韓国慶尚南道の大学で現地の研究者の協力を得て質問紙調査を実施した。日韓ともに授業担当者に質問紙の配布及び回収を依頼した。日本人は205名が参加し、平均年齢は18.75歳(SD=0.71)である。韓国人は119名が参加し、平均年齢は21.82歳(SD=2.84)である。

分析では、まずDIF分析を用いて文化的等価性が確認された項目を、その後の分析に用いた。異文化態度と国イメージについて、「国」と「外国人友人の有無」の2つの変数を取り上げて2要因分散分析を行ったところ、日本否定イメージと韓国否定イメージについて交互作用効果が認められた。

パス解析の結果より、「韓国」に対しては、「国民イメージ」→「国イメージ（肯定イメ

ージ)」→「他国民・他民族に対する感情」→「外国語への関心」という因果関係（因果パス）が、日本人大学生においても韓国人大学生においても認められた。その一方で、「日本」に対しては、日本人大学生、韓国人大学生のいずれにおいても、これらの4つの変数の間に連続的な因果関係は認められず、他の変数が介在していることが推測された。具体的には、「国民イメージ」は「国イメージ」を形成し、また、「他国民・他民族に対する感情」は「外国語への関心」を形成していたが、「国イメージ」と「他国民・他民族に対する感情」の間には、因果関係は認められなかった。

比較文化研究における等価性の問題について、本分析結果をもとに、DIF分析の意義を再評価するとともに、イメージ変数に関して「外国人友人の有無」による相違について考察された。加えて、本研究の最も重要な目的、すなわち日本人大学生と韓国人大学生がそれぞれに、日本イメージ、日本人イメージをどのようにいただき、またこれらのイメージが「他国民・他民族に対する感情」を引き起こし、「外国語への関心」にどのような影響を及ぼしているかについては、日本人大学生と韓国人大学生とでほぼ同様な因果関係を有していることが示された。さらには、「韓国」に対する場合と、「日本」に対する場合では、これらの変数間の因果関係が異なることが示され、異文化態度や異文化間交流に関わる施策を考えていく上では、対象となる国によって有効な方策が異なるであろうことが提起された。

引用文献

- 浅羽祐樹・木村幹・佐藤大介 (2012). 徹底検証 韓国論の通説・俗説 日韓対立の感情 vs. 論理 中央公論新社
- 坂西友秀・王 晨 (2007). 「人種」・「民族」ステレオタイプと「ナショナル・アイデンティティ」—探索的検討— 埼玉大学紀要 教育学部, 56, 39-57.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 長谷川典子 (2005). テレビドラマ「冬のソナタ」の受容研究——日韓コミュニケーションの観点から—— 多文化関係学, 2, 15-30.
- 一二三朋子 (2003). 意識的配慮の共生的学習に関する因果モデルの検討：アジア系留学生の場合 教育心理学研究, 51, 175-186.
- 石井英理子 (2010). 異文化教育を統合したタスク中心の言語教育：日本で英語を学習する高校生の異文化コンピテンスを中心に 上智教育学研究, 23, 16-42.
- 石井健一 (2011). 韓国ドラマ視聴の要因分析——対外意識とコンテンツ利用の関連—— Department of Social Systems and Management Discussion Paper Series. No.1282.
- 鄭大均 (2010). 韓国のイメージ——戦後日本人の隣国観—— 中央公論新社

- 鄭大均 (1998). 日本(イルボン)のイメージ——韓国人の日本観—— 中央公論新社
- 加賀美常美代・朴志仙・守谷智美・岩井朝乃 (2010). 韓国における小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージの形成過程：日本への関心度と知識との関連から 言語文化と日本語教育, 39, 41-49.
- 加藤秀治郎 (2005). 日韓政治コミュニケーションと日本人の韓国イメージ 東洋法学, 49, 135-155.
- 金由那 (2006). 韓国語学習者の日本人と在日韓国人との意識の相違——韓国語・韓国・韓国人イメージと学習要因に着目して—— 社会言語科学, 8, 26-42.
- 黒田勝弘 (2014). 韓国人の研究 角川学芸出版
- クォン・ヨンソク (2010). 「韓流」と「日流」：文化から読み解く日韓新時代 日本放送出版協会
- 向田久美子・坂元 章・高木栄作・村田光二 (2007). オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか—シドニー・オリンピックを中心に 人間文化創成 科学論叢, 10, 297-307.
- 向田久美子・坂元 章・村田光二・高木栄作 (2001). アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化 社会心理学研究, 16, 159-169.
- 見城悌治 (2004). 「アジア」というイメージ——現代大学生の持つ多元的理解—— 千葉大学留学生センター紀要, 10, 62-78.
- 中原洪二郎・潮村公弘 (2004). 韓国人と日本人相互の民族的印象形成と、両者の印象上での在日コリアンの位置づけに関する計量的分析 人文科学論集, 38, 119-131.
- Nam Sangyoung (2009). A study on the 'Hallyu' and Education of Korean Language in Japan *Bilingual research*, 39, 79-112.
- 沼田健哉 (1989). 世論調査からみた日本人の対外態度 桃山学院大学社会学論集, 23, 65-125.
- 生越直樹 (2012). 台湾における韓国に対するイメージ形成と韓国語学習——日本調査との比較を中心に—— 斎藤明美(編) 言語学習と国、国民、言語に対するイメージ形成の研究 Seoul, Korea: J & C. pp. 117-142.
- 斎藤明美 (2012). 韓国における日本、日本人、日本語に対するイメージ形成と日本語学習 斎藤明美(編) 言語学習と国、国民、言語に対するイメージ形成の研究 Seoul, Korea: J & C. pp. 289-311.
- 佐久間 勲・日吉昭彦 (2013). ロンドン・オリンピック大会と国民イメージ 社会情報学会大会研究発表論文集 2013, 29-32.
- Shiomura, K., & Shin, J. (2016). Investigations of the causal relationship between the images of nations/citizens and the sentiment towards other citizens for Korea and China. Poster presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural

Psychology, held at Nagoya, Japan. Program Book P.94.

- 高木栄作・坂元 章 (1991). ソウルオリンピックによる外国イメージの変化——大学生のパネル調査—— 社会心理学研究, 6, 98-111.
- 田辺俊介 (2004). 国別好感度から見る「日本人」の世界認知——JGSS 第一次予備調査を用いて—— JGSS 研究論文集, 3, 199-213.
- 田崎勝也 (2008). 社会科学のための文化比較の方法 ナカニシヤ出版
- van de Vijver, F. L. R., & Leung, K. (1997). *Methods and data analysis for cross-cultural research*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 渡辺良智 (2006). 日本人のアジア認識 青山学院女子短期大学総合文化研究所年報, 14, 35-54.
- 渡邊 聡・石井健一 (2012). 韓流と韓国イメージ——ナショナリズム的態度との関係—— 国際関係・比較文化研究, 11, 195-215.
- 魏 然 (2014). 中国の若者における日本ポピュラーカルチャーの受容と対日イメージ: 青少年に対するアンケート調査をてがかりに 学習院大学大学院政治学研究科政治学論集, 27, 33-56.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, (1), 73-90.
- 山崎瑞紀・倉元直樹・中村俊哉・横山剛 (2000). アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 48, 305-314.
- 山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 (1997). アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 45, 119-128.
- 伊 秀美・南 相璽 (2016). 日本人の韓国人に対するイメージに関する調査研究: 金沢大学学生の「初習言語」学習者間の比較を通して 言語文化論叢, 20, 115-140.